

子規、新聞記者になる! その2

# 子規の従軍

## 日清戦争が起こる

明治27年(1894年)、日本と清(今の中国)との間に戦争が起こりました。そして、たくさんの記者が取材のために清に行きました。このような記者のことを「従軍記者」(軍隊についていく記者)といいます。

## 子規、従軍記者になる

子規は28才の時、「自分の目で戦争の様子を取材したい」と考え、病氣(肺結核)を心配する家族や友達の反対を押し切って従軍記者になり、清へ向かいました。

## 期待はずれでがっかり

しかし、子規が清に着いた時、もう戦争は終わろうとしていました。しかも、さまざまな情報を軍がきびしく取りしまっていて、取材はあまりできませんでした。

## いいこともありました

取材にはがっかりした子規ですが、軍の医者で、小説『舞姫』などで有名な作家・森鷗外と出会うことができました。そして子規は、鷗外を訪ねては、文学について話をしました。日本に帰った後も、2人の交流は続きました。

## 手紙 従軍している先ばいへの手紙



これは、子規が日本から、従軍している先ばいへ送った手紙です。子規は清の様子を描いた絵を記事にしようと考え、建物や風景のスケッチを送ってほしいとたのみました。「たとえばこのような感じで描いてみてください」と絵の例を描いています。



▲清に行く前にとった写真(子規28才)

## 中国にもある子規の句碑



金州城にて 子規  
行く春の  
酒をたまはる  
陣屋哉

これは、中国の大連市にある句碑の写真です。子規が従軍した時に作った俳句が書いてあります。

子規の句碑が中国にもあるなんて、びっくりですね。



展示室で  
千エツク! 子規の従軍かばんを観察しよう!



▲これは、子規が清に行く時に使ったかばんです。「山雨海風」と書いてあります。

## 帰国したけれど...

子規は、清に約1か月いた後、日本に帰ることになりました。しかし無理をしたため病気が悪くなり、帰国するとすぐに、神戸病院に入院してしまいます。子規は生死のさかいをさまよいましたが、約2か月後にやっと退院します。その後、須磨保養院に入り、体力が回復するのを待ちました。



▲子規が入院した神戸病院。家族や友達がつきっきりで看病しました。

明治時代の  
松山の写真も  
あるよ。



展示室で  
千エツク! 名作『坊っちゃん』と松山

3階へ行く階段の前に、「名作『坊っちゃん』と松山」のコーナーがあります。「坊っちゃん」は、子規の親友・夏目漱石が松山を舞台にして書いたといわれる有名な小説です。原稿の1ページ目や、名場面のさし絵を、パネルで紹介しています。